脱植民地化―台湾史再構築の複雑な経験

林　載爵

目次

1. 1934 年から：想像、郷愁と真実が混在する台湾
2. 1945 年以降：台湾史再構築の複雑な経験
3. 言語学上の論議：「日據」か「日治」か？「光復」か「戦後」か？
4. 台湾史変遷に関する論争

脱植民地化の観点から見るとき、被植民者はその統治から脱した後、自主性をもってその経験をあらためて検証し、新たな自我意識を確立すべきである。しかし台湾人は、この過程を新しい統治者による統治策略と手段によって抑制されてしまった。さらに脱植民地化の歴史再構築の過程において、その機会を失っただけではなく、曲がりくねった泥道を歩むこととなった。東南アジア文化地図の構造の中で、これは現代台湾の最も主要な経験であり、重要な課題でもある。

1.　1934 年から：想像、郷愁と真実が混在する台湾

1934 年 9 月、日本で頭角を現わしていた作曲家・江文也は台湾への短い帰郷の際、故郷の美しい風景に感動し、管弦楽曲「南の島に拠る交響的スケッチ」を作曲した。その第四楽章「城内の夜」は、1936 年に開催されたベルリン・オリンピックの芸術競技(Best Composition Award in the International Musical Composition Competition for the Berlin Olympics)に「台湾の舞曲」と題名を改めて出品され、選外傑作（認証賞）の評価を得た。この栄誉により、彼は日本の音楽界において抜きん出た存在となった。また詩人・江文也としても「台湾の舞曲」の楽譜の扉ページに優美な題辞を残している。

> ……私はそこに華麗を盡した殿堂を見た　荘厳を極めた閣樓を見た　深い森に圍まれた演舞場や祖廟を見た　しかし　これらのものはもう終りを告げた　これらはみな霊となつて微妙なる空間に融け込んで幻想が消失せるやうに　神と人の子の寵愛をほしいままに一身に集めたこれらは　抜殻のやうに闇に浮んで居た。
> ア丶！　私はそこに引き潮の渚に残る二ツ三ツの泡沫のある風景を見た……

江文也は 1916 年、6 歳の時には台湾から福建省アモイ市に転居し、1923 年以後はずっと日本で学んでいる。1934 年以前は台湾に時折戻るだけで、台湾のことはまったく理解していなかった。彼はこの詩の中で、殿堂、閣楼、祖廟、演舞場といった古めかしい形象を用いているが、表現しているのは終焉、消失、残された泡の影のような幻滅感だ。まさか彼にとって台湾とは、本当にそのような空虚で真実とも幻ともつかない、とらえどころのないものだったのではあるまい？「台湾の舞曲」は奇妙な幻想と深い思慕、輝きと哀愁、憧憬と悲哀に満ちているが、最初から最後まで台湾らしい要素はまったくなく、ただ純粋に創作された現代の旋律である。江は台湾に感動したが、実際は本当の台湾の姿を把握してはおらず、彼にとっての台湾は想像と郷愁に彩られていた。1938 年、江は日本を離れて北京に定住する。

劉錦堂は日本へ留学した最初の台湾人画家だ。1915 年に台湾を離れ日本へ赴き、1921 年東京美術学校を卒業後は北京に定住、生涯台湾へ戻ることはなかった。1934 年から彼がこの世を去るまでの 3 年間に「台湾遺民図」を制作、自らを「台湾遺民」とした。この作品には並んで立っているチャイナドレス姿の 3 人の女性が描かれている。左右の 2 人は合掌した祈りの姿勢をとり、中央の女性は右手で握った地球儀を胸の前に掲げている。そして、下に垂らした左腕は手のひらを正面に向けて広げており、その中央には目が 1 つ描かれている。彼の学生が何のためかと問うと、劉は「この目は台湾をはるかに眺めているのだ」と答えた。これもまたある種の郷愁をまとった台湾である。

作家・楊逵は 1924 年から 1927 年まで日本へ留学した。台湾へ戻った後、1934 年に短編小説「新聞配達夫」が雑誌「文学評論」第 1 巻第 8 号（1934 年 10 月）の第二席に入選し、日本の文壇に登場し

た初の台湾人作家となった。楊逵の小説の中では、知識分子はみな反省の能力、勇敢さ、果断さ、そして確固たる行動力を備えている。彼らは物語を展開させ、最大の苦境からショックを味わう。その経験を通じて行動に目覚め、群衆を反抗の行列へ導き権利を奪取する。そして物語は希望に満ちた展望で締めくくられる。「新聞配達夫」の主人公は、日本から台湾へ戻って反抗運動へ身を投じることを決意し、物語の最後にこう語る。

> 私は確信に満ちて、巨船蓬萊丸の甲板から、表こそ美々しく肥満して居るが、一針当れば、悪臭プンゝゝたる血膿の迸りを見るであらう台湾の春を見つめた。

この言葉は、すでに台湾文学の古典的名言となっている。マルクス主義の影響を強く受けた楊逵は、このような方法で台湾を理解し、台湾の真実を抱きしめたのである。

楊逵が闘争と希望をもって台湾を描いていたとき、もう 1 人の作家・呂赫若は 1934 年に小説「牛車」を書き、1935 年には楊逵に続いて「文学評論」第 2 巻 1 号に掲載された。「牛車」は呂の傑出した緻密な表現技巧を反映しているだけでなく、作者の台湾社会に対する深い理解も表現している。彼は台湾の植民統治、階級や性差による抑圧といった解決しがたい多重構造社会の矛盾を見てきた。これは台湾の真実の 1 つである。

それから 80 年近く経った 2011 年、台湾の若手漫画家 AKRU の「北城百画帖（カフェーヒャッガドウ）」が、文化庁主催の第 15 回「メディア芸術祭」審査委員会推薦作品に選出された。「北城百画帖」は、台湾博覧会が開催された 1935 年の台北が舞台。近代洋式と日本式が混ざり合い台湾社会が形成された 1930 年代のモダンな時代を描く、昭和の雰囲気たっぷりのロマンあふれる物語だ。書籍の広告にはこう書かれている：「1935 年の台北は夢のように美しかった。真夜中でも不思議な色彩がきらめいていた」。21 世紀に入った後の、一種風変わりな郷愁だ。

日本統治時代の知識分子は台湾、日本と中国の狭間に身を置くほかなく、その三者、つまり本土、国家と故郷の揉め事の中で、さまよい、揺らぎ、さらには魂のあがきにぶつかってきた。この中で、想像、郷愁と真実が照らし出した異なる台湾の認識が現れた。混乱は今日に至るまで続いており、1945 年以降の台湾史再構築の複雑さを生み出している。

2. 1945 年以降：台湾史再構築の複雑な経験

台湾人は植民地時代、早期の武装反抗から 1920 年代の自治を要求した穏やかな政治社会運動までを経験した。そして 1945 年、突然自分たちが日本の敗戦によって中国へ「開放」され、あるいは「復帰」したことを知った。台湾の脱植民地化の経緯は特殊である。それは統治国の政治によって決められたものでもなく、自らが推し進めた民族主義運動の結果でもない。中国大陸からやってきた国民党政府の軍隊が接収し、主導したにすぎない。ただ、台湾人が国民党政府を歓迎したのは束の間だった。原因は、接収した側の「戦争経験」と現地人の「植民経験」が作り出した感情や経験、そして歴史と記憶が全く異なったからだ。

中国大陸からやってきた人々は、骨まで刻み込まれた戦争経験はあるものの、「植民」とは何かを理解することはできなかった。「植民主義」は彼らの歴史的記憶にはないからだ。一方、台湾人は半世紀にわたる植民統治と中国からの分離の後、自分たちはすでに「完全な」中国人ではないと認識していた。台湾人は国民党政府についてよく知らなかったし、さらに言語も障壁となり、スムーズな意思疎通などできるはずもなかった。

そのほか、台湾の植民地時代における経済発展も、戦禍に蹂躙された中国大陸との間に大きな隔たりを生んだ。台湾人は日本統治時代に植民地として近代化を経験しており、「植民の近代性」は身をもって感じた体験あった。しかし国民党政府が台湾を接収した後、台湾経済は崩壊し腐敗していく。台湾人の不満は高まり、ついには 1947 年の「228 事件」が発生する。その後 1950 年代の「白色テロ（白色恐怖）」へと続き、40 年にわたって軍隊と警察、スパイが権力を握った。1980 年代、民主化運動とともに再び高まった「アジアの孤児」[1]という悲しい意識は、台湾人にとって忘れること

[1] 日本統治時代の台湾人作家・呉濁流の小説。台湾人のアイデンティティ問題が題材。

のできない歴史の傷跡を伝えている。

そのため、大多数の人が同意するように、台湾の民主化は族群（ethnic、 エスニック集団）の矛盾が原動力となっている。1945 年以降、台湾の政治権力は国民党とともに台湾へやってきた外省人（台湾全人口の約 12%）が握ってきた。本省人（同約 88%）は中小企業を興すことに活路を見出し、台湾社会の中堅層を形成した。経済力を得た本省人は、自然と政治権力の偏りに不満を抱くようになり、彼らが民主化を要求する頃にはその影響力は大きくなっていた。台湾では、いわゆる「反対者」と「統治者」の境界がちょうど族群の境界と重なる。族群の区別は強力な動員能力を備えており、この問題となると人々はすぐさま「私たち」と「彼ら」に分かれるのだ。

このような背景の下、台湾史の再構築は非常に複雑になる。1945 年以後、国民党が実施した台湾の中国化政策において、「台湾史」は学術界から追いやられ、中国の地方史とみなされた。台湾の特殊性についての主張は抑圧され、欧米の学者は台湾を地域研究の対象とみなし、台湾の学者は台湾史研究の重点を民俗と古跡に置いた。1970 年代の民主化運動初期になって、台湾の研究者たちは正統な史学の教えを離れて、台湾の歴史と文化伝統の再評価を試み始めたのだった。

民主化運動と台湾史の再解釈が結合したとき、台湾における植民統治時代の歴史的経験は、国民党統治に対抗する原動力の源となった。かつて抑圧された 1895 年から 1945 年の歴史が掘り起こされ、当時の政治・社会運動の文献が整理、出版され、活動家たちの思想と功績が広く読まれることとなった。また、かつて日本語で発表された作品は中国語へ翻訳された。突然、台湾人は埋葬された豊富な遺産があったことを発見したのだ。民主化運動に身を投じた知識分子は、自身と植民地時代の政治社会運動を政治的な意味合いで結びつけたが、これは非常におかしな状況である。台湾が脱植民地化の真っ只中にあったときには、統治者であった日本政府を批判する道具だった植民地時代の歴史的経験が、今度は国民党政府に対する民主化運動を鼓舞する材料となったのだ。

1980 年代から、正統な中国史の権威・地位との均整をとるため、植民地時代の歴史が新たに検証されることとなった。同時代の歴史的地位を再評価することは 1 つのキーポイントとなる議題であり、日本文化が現代台湾の形成に与えた影響の過程を討議することである。またこれは、台湾における植民化と近代化の関連をさらに総体的に考えることでもある。政治的な対立を伴い、台湾史の再構築についての論議は途切れることはない。その核心となるのは、日本による植民統治下の台湾をどう扱うかという点である。

3. 言語学上の論議：「日據」か「日治」か？「光復」か「戦後」か？

民主化の進展と台湾史研究の始まりに伴い、1990 年代から日本統治時代をどう呼ぶべきかが非常に重要な論争となった。周婉窈教授の研究によると、1951 年 11 月、新聞・出版・放送・映画などマスコミ媒体を管理する台湾省新聞処が、各社に対し以下のような公布を行った。「日本による台湾の侵略占拠は、清朝光緒乙未年（1895 年）から中華民国 34 年（1945 年）の光復[2]までの 50 年に及んだ。この期間を『日治時期』と呼称することが慣用化しているが、これは非常に憂うべきことである。･･･台湾省同胞の国家民族意識をたやすく失わせるため、正す必要がある。」これ以降、政府によって「日據」が日本統治時代を指す標準用語と定められたのだった。

「日據時代」という呼称は政治色が明らかで、背景には国民党政権がこれを利用して自らの台湾統治の正当性を作り上げる目的が隠されている。1990 年代以後、日本統治下の台湾史について再評価が進み、この呼称の使用も批判を受けるようになった。台湾は清朝に放棄されて日本に割譲されたものであり、光緒帝自身が「文武官員内渡」[3]を命じたことが批判の論拠である。周教授はこれについてこう見解を述べている。

> 私個人は「日據」を放棄することは道理にかなっていると考える。「日據」とは「日本の占拠」であり、英語で言うならば Japanese occupation となり軍事的な意味を持つ。日本

[2] 中国語で「国家や領土を回復する」の意。
[3] 清朝光緒帝が日本への台湾割譲に際し、台湾の文官・武官に対して中国大陸へ戻るように下した命令。

が台湾で行ったのは植民統治である。これは近代世界史ではよく見られる帝国主義国の用いる統治形態である。もしも occupation という語を用いるなら、歴史的事実を表すことはできない。例えば、インドは英国に数百年にわたり植民統治されたが、その歴史を「英據印度史（英国占領下のインド史）」と言うこともできなくもない。しかし、「英国植民統治下のインド（あるいは英国統治下のインド）」という表現と比べると、後者のほうが適切なのではあるまいか。一般的な呼称の英訳は、前者は India under British occupation であり、後者は India under British colonial rule（あるいは India under British rule、略称は British India）となる。

20 年近くが経った今日、かつて使用を禁じられた「日治」が次第に「日據」に取って代わるようになり、いまや「日據」が使われることは少なくなった。ただし今も「日治」の使用に疑問を呈する人々は、「統治」の概念を問題視している。日本植民地時代の官僚はどのようであったと想像するか？　台湾人の被統治経験に対する見解は？「日治」を使うことは日本植民時代の現代性に対するある種の思慕ではないのか？　一方、「日治」の概念においてもまだ一致した用法はない。例えば「日本時代」「日本統治時期」「日本植民統治時期」といった呼び方が見られるが、少なくともいずれも「占拠」という概念からは脱している。

「日據」と「日治」の論議に関連して、「光復」と「戦後」の問題がある。1946 年、国民党政府は毎年 10 月 25 日を「台湾光復節」とした。「光復」という言葉はもちろん「占拠」に対するものであり、「日據」と対を成す。「日據」の使用に疑問が呈されたとき、「光復」もまた非難の対象となり、「戦後」や「終戦」と言い換えられた。現在は「台湾光復節」は形だけが残り、休日扱いも取り消されている。

このような言語上の論争の結果、最大の変化だったのは、台湾史における時代の区分方法が徹底的に改変されたことだ。現在、一般的な区分方法は、先住民時代、オランダ・スペイン統治時代、鄭成功統治時代（1661 年～1683 年）、清朝統治時代（1684 年～1895 年）、日本統治時代（1895 年～1945 年）、戦後（1945 年～）となる。これは 30 年に及ぶ台湾史再構築の過程が、紆余曲折を経てたどり着いた基本的な共通認識なのである。

4. 台湾史変遷に関する論争

台湾史再構築の過程は、台湾史の変遷に関する異なる解釈と弁論に影響を及ぼした。最も早い時期に正統とされた意見は、1970 年代の李國祁教授による「内地化」という概念だ。同教授は 17 世紀以降の台湾の漢文化化と中国大陸への同化という長期間にわたる過程を分析し、1895 年以前に清朝が台湾を帝国領土に組み入れ、中央／辺境という関係の一部としたとき、台湾はすでに中華文化の「文治社会」であったという見方である。つまり、台湾で漢民族が形成した移民社会は、清朝統治時代を経て、最終的には政治・経済活動および文化行為において中国大陸のそのほかの地方と同じ社会へと変化を遂げていたということである。

一方、人類学者・陳其南は相反する「土着化（indigenization）」という概念を提唱した。この概念は、清朝時代の漢民族が台湾に作った「移民社会（immigrant society）」は、中国から辺境へ向けて拡大した新社会ととらえる。ただしこの新社会は発展に伴って新たな同一感が生まれ、混乱した移民社会は最終的には台湾に「土着社会（native society）」として定着したと考える。この概念は、台湾と中国大陸間の分裂と不連続性、台湾史が経験した突出した多様性を重視している。

この問題に続くのは、台湾に現代性をもたらしたのは誰の功績か、という議論である。1980 年代からこの論争は止むことがない。ある者は清朝の役人・劉銘伝であると考える。劉銘伝は 1884 年から 1891 年の在位期間にさまざまな建設を推進し、台湾近代化の礎を築いたとされる。またある者は日本人の功績だとする。とくに台湾総督府の民政長官であった後藤新平は、1898 年～1906 年の任期中に台湾近代化を推進した。この問題は日本の台湾統治時代における功績を再評価する上で主要な論争である。

これに関係して、1945 年以降、国民党政府が採用した統治手段はある種の「新植民政策」とは言えないだろうか、という問いがある。この論争は

1980 年代の民主化運動の高まりに伴い刺激され続け、挑発され、徐々に激しくなった。国民党統治に反抗する者は、政府にとって台湾は「一時的な拠点地」に過ぎず、台湾人の文化や歴史的複雑性を理解しようと試みもせず、多くの現地文化・習俗が取り残され、軽視され、抑圧されたと考えている。これは、族群の矛盾と民主化運動がいかにして結びついたのか説明するものである。それでは国民党政府が「新植民者」ならば、国民党とともに台湾へ渡ってきた外省人はどう見るべきだろうか？　植民者（settlers）、移住者（migrants）、移民（immigrants）、難民（refugees）、亡命者（inexile）、あるいは離散者（diaspora）だろうか？　明らかに外省人はこのいずれにも当てはまらない。この論議の複雑さは、台湾の脱植民地化の困難な過程、そしてポスト植民地時代の混乱したさまざまな衝突と矛盾を十分に表している。

問題のキーポイントは、1945 年以降に台湾へやってきた国民党政府と外省人である。彼らは中国大陸で戦争を経験しているが、本省人の日本植民としての思いを理解することはできない。一方、本省人は敗戦によって移住を余儀なくされた政府下の人民の痛みを理解することはできない。1945 年以降、この異なる歴史的感情と記憶が出合い、脱植民地化の過程にあった台湾を非常に奇妙な状態に巻き込んだ。過去の植民経験の再評価をもって新しい統治者に抵抗したため、遅れてゆっくりとやってきた台湾の後植民地時代は、困難極まるものとなったのだ。

前出の周教授は、『台湾歴史図説』（増補版、2009）の結びでこのように述べている。

> 21 世紀最初の 10 年で、台湾社会は 2 つの歴史的記憶をどう繋ぎ合わせるかというキーポイントに正面から向き合ってきた。我々は 1945 年に戻ることはできないのだから、内部の融合のため、理性的な意思疎通のある社会を作るため、この 2 つの歴史的記憶を開放された状態にしておかねばならない。相手に対して開放すること、それがひいては遥かな遠い過去に向かって開放することになる。これによってのみ、分裂した社会は「正反合」を生み出す力を獲得できるのだ。

私もこの言葉をもって本報告の結びとする。

（りん　りんでん・聯経出版社）

林載爵（Linden Lin）
聯経出版社発行者兼編集長、上海書店社長。
1979－2001 年、東海大学歴史学科で講義を行う。
1987 年、聯経出版社編集長。
2004 年、聯経出版社発行者兼編集長。
2005 年、上海書店社長。
2007－2010 年、台北書展基金会会長。
2010 年、「出版風雲人物」入選。
2011 年、フランスの芸術・文学騎士勲章受賞。
主な著書は《譚嗣同》（1977）、《東海大学校史、1955-1980》（1981）、《台湾文学の二種の精神》（1996）。